

**麻疹（はしか）** 麻疹ウイルスの空気感染によっておこります。感染力が強く、予防接種を受けないと、多くの人がかかる病気です。発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹を主症状とします。最初3～4日間は38℃前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うと、また39～40℃の高熱と発疹が出ます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失します。しばらく色素沈着が残ります。主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者100人中、中耳炎は7～9人、肺炎は1～6人に合併します。脳炎は1,000人に2人の割合で発生がみられます。また亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は約5万例に1例発生します。また麻疹（はしか）にかかった人は数千人に1人の割合で死亡します。わが国では現在でも年間約50人の子がはしかで命を落としています。予防接種率が高い国では麻疹の流行がみられていません。ぜひ予防接種を受けましょう。

**風しん（三日ばしか）** 風しんウイルスの飛沫感染によって起ります。潜伏期間は2～3週間です。軽いカゼ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。発疹も熱も約3日間で治るので、「三日ばしか」とも呼ばれることがあります。合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は患者3,000人に1人、脳炎は患者6,000人に1人くらいです。大人になってからかかると重症になります。

妊婦が妊娠早期にかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気をもった児（心臓病、白内障、聴力障がいなど）が生まれる可能性が高くなりますから、風しんのワクチンを受けていない方は、妊娠前に予防接種を受けておくことが大切です。

## 麻疹（はしか）風しんで使用するワクチンについて

### ○麻疹風しん混合ワクチン（生ワクチン）

・麻疹ウイルス及び風しんウイルスを弱毒化し、混合してつくったワクチンです。麻疹（はしか）・風しんの予防接種では原則としてこの混合ワクチンを使用します。副反応の主なものは、発熱（22.3～27.3%）と発疹（8.6～12.2%）です。なお、これらの症状は接種後4～14日に多くでます。なお、接種直後から数日中に過敏症状と考えられる発熱、発疹、そう痒などがでることがありますが、1～3日で治ります。これまでの麻疹単味ワクチン、風しん単味ワクチンの副反応のデータから、アナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの副反応が、まれに生じる可能性があります。

### ○麻疹単味ワクチン（生ワクチン）

・麻疹ウイルスを弱毒化してつくったワクチンです。麻疹（はしか）・風しんの予防接種では原則として麻疹風しん混合ワクチンを使用しますが、風しんにかかったことがある場合などで特に希望した場合に使用することが可能です。麻疹単味ワクチンは定期の予防接種のワクチンの中では発熱率の比較的高いワクチンです。健康状況調査報告によると、ウイルスが体内で増える期間の後（接種後5～14日後）に約5.4%に37.5℃以上38.4℃未満、約8.0%に38.5℃以上の発熱、約5.9%に麻疹様の発疹が認められます。通常は1～2日で消失します。また、発熱に伴う熱性けいれん（約300人に1人）をきたすことがあります。その他、脳炎・脳症（100万～150万人に1人以下）、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）の発症（100万人に0.5～1.0人）が知られています。

### ○風しん単味ワクチン（生ワクチン）

・風しんウイルスを弱毒化してつくったワクチンです。麻疹（はしか）・風しんの予防接種では原則として麻疹風しん混合ワクチンを使用しますが、麻疹にかかったことがある場合などで特に希望した場合に使用することが可能です。風しん単味ワクチンも生ワクチンですから、麻疹と同じようにウイルスが体内で増えます。健康状況調査報告によると、小児の接種では、接種後5～14日までに約1.9%に37.5℃以上38.4℃未満、約2.6%に38.5℃以上の発熱、約1.3%に発疹、約0.5%にリンパ節腫脹が認められます。なお、お母さんが次の子どもを妊娠しているときにお子さんが風しんの予防接種を受けても、接種を受けたお子さんからお母さんに風しんウイルスが感染した例はありませんので、心配はありません。

※麻疹については1歳から2歳の間にかかる子が多くなっており、風しんについては2～3歳になると、かかる子どもが急に増えます。1歳になったらすぐに予防接種を受けるように努めましょう。**ポリオの2回目接種と接種時期が重なる場合は、麻疹（はしか）・風しんの予防接種を優先しましょう。**

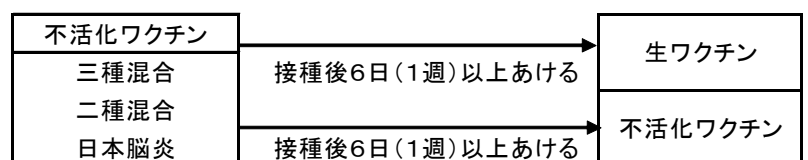
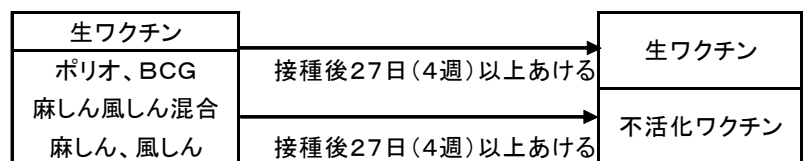
※麻疹風しんの予防接種の場合、ガンマグロブリンの注射を受けたことのある方は3か月以上過ぎてから、川崎病などでガンマグロブリン大量療法を受けたことがある方は6か月以上過ぎてから受けてください。（ガンマグロブリンは、血液製剤の一種でA型肝炎等の感染症の予防や重症の感染症の治療目的などで注射することがあります。）

※副反応など、気になる症状がある場合は疾病対策課またはかかりつけの医療機関等にご相談ください。

## 異なる種類の予防接種を受ける場合

異なる種類の予防接種を受ける場合は、その効果および安全性のため、最低次の期間をあけることになっています。なお、同じ種類のワクチンを何回か接種する場合には、それぞれ定められた期間がありますので、誤らないようにしてください。

急に保育園や幼稚園に入ることになったり、家族と海外で暮らすことになったりして、異なった種類のワクチンを特に急いで接種する場合は、医師の指示により同時接種ができます。



## ◆ 副反応がおこった場合

予防接種のあとまれに副反応が起こることがあります。また、予防接種と同時に、ほかの感染症がたまたま重なって発症することがあります。

予防接種を受けた後、注射部位のひどい腫れ、高熱、ひきつけなどの症状があったら、接種医のもとで必ず診療を受けてください。特に症状の強いときは、**疾病対策課**へも連絡してください。

## ◆ 予防接種を受けた後の一般的注意事項

予防接種を受けた後30分間は、接種会場でお子さまの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応はこの間におこることがあります。接種後生ワクチンでは2～3週間、不活化ワクチンでは24時間は副反応の出現に注意しておきましょう。入浴は差し支えありませんが、わざと注射した部位をこすことはやめましょう。接種当日はいつもどおりの生活をしましょう。はげしい運動はさけましょう。

## 予防接種を受けに行く前に

### 予防接種を受けることができない人

- ① 明らかに発熱のある人(接種会場で測定した体温が37.5℃以上の場合)
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
- ③ その日に受ける予防接種によって、または予防接種に含まれる成分で、アナフィラキシー(接種後30分以内に起こるひどいアレルギー反応)を起こしたことがある人
- ④ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

### 予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなくてはならない人

次に該当すると思われる人は、主治医がある場合には、必ず前もって診ていただき、その医師のところで接種を受けるか、あるいは診断書又は意見書をもらってから接種に行きましょう。

- ① 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けている人
- ② 前に予防接種を受けたとき、2日以内に発熱、発しん、じんましんなどアレルギーと思われる異常がみられた人
- ③ 今までにけいれん(ひきつけ)を起こしたことがある人  
(3か月以上経過していないと予防接種をうけられない場合があります。)
- ④ 過去に中耳炎や肺炎などによくかかり、免疫状態を検査して異常を指摘されたことのある人及び近親者に先天性免疫不全症の人がいる人
- ⑤ ワクチンにはその製造過程における培養に使う卵の成分、抗生物質、安定剤などが入っているものもありますので、これらにアレルギーがあるといわれたことのある人
- ⑥ 薬の投与を受けて皮膚に発疹が出たり、体に異常をきたしたことがある人

特定疾患などで市の予防接種協力医療機関での接種が困難な人、又は遠隔地に長期滞在し市の予防接種協力医療機関で接種を受けることが困難な人はお問い合わせください。